

する土壌が、現在の医療現場には失われている。

最後四番目に、患者が直面する様々な選択の背景には、人生を総動員したうえでの決断がある。それは決して医療者の論理に適合するものではなく、極めて個別的な価値観のもと決断されてゆくものである。そのため、医療者の理屈ではなく、人生観などの患者の主観世界にまで掘り下がって自己決定を支え、その選択の証人となっていくケア提供者が求められてくるはずであるが、重要視されていない。

以上のように、医療現場には、

- (一) 患者の苦悩や問いを、常に内在するものとして捉え
- (二) その苦悩や問いのままにある患者を受けとめ
- (三) 時に喚起的に、患者の死生観や宗教的言説を紡ぎ
- (四) その人生を総動員した自己決定プロセスの同伴と生きざまの証人となる

ことのできる存在が求められてくる。こうした対話を通して、患者はたとえ不完全であったとしても、最期まで自らの力で「生ききる」実感を持つのではないだろうか。

仏教は本来、解決しえない苦悩をもった人間への関心を出発点とし、苦悩のなかで、宗教的「いのち」の視座に生死の根元を差し向けていく。僧侶がスピリチュアルケアの担い手として医療に関わる際、チーム医療の一員としての立場を第一としつつも、やはり宗教者としても、患者が「生ききる」ために、苦悩や問いをそのまま受けとめ、宗教的「いのち」の視座を含む対話を通じた寄り添う姿勢の必要性を示していく役割がある。

「選択」から「応答」へ

——いのちの倫理における宗教の役割——

空閑 厚樹

私たちは「いのち」をめぐる議論において、宗教者からの発言に何を期待しているのだろうか。

医療を含む科学技術の急速な進展は私たちに新たな倫理的問題をつきつけることになった。そして、これらの問題に対する明快な解答を私たちは持ち合わせておらず、混乱の中にあるといっていだろうか。このような状況の中で私たちが宗教に期待しているのは、確固たる「世界観」の提示ではないだろうか。宗教的な教えが提示する世界観は、私たちの人生に意味を与え、人間の生や死にも意味を与えてくれる。この世界観が社会で広く共有されていれば、宗教者の発言は重みを持ち、私たちは医療技術の進展にともなう新たな倫理的問題に対して明快な決断を下すことができるだろう。そしてこれは倫理的ジレンマに対する「処方箋」となりうる。

しかし、世俗化が進み価値観が多元化した現代社会において、このような意味で宗教に期待を寄せることは、「ないものねだり」となる可能性が高い。なぜならそうした多元的な社会において宗教的教えは、その宗教を信仰する信徒に対してのみ影響力を持つものだからだ。また、たとえば単一の宗教が社会のマジョリティを占めていても、いわゆる工業「先進」諸国においては、かつては社会的に大きな影響力を持っていた伝統的な宗教が多かれ少なかれ形骸化し、「名目上」寺や教会などに属しているに過ぎないような信徒が増えていることを考えれば、

その社会的影響力も減少しつつあるといえるだろう。さらに、「いのち」をめぐる議論における宗教への上記のような期待は、ないものねだりに終わる可能性があるだけではなく、望ましいものでもないと考える。なぜなら、このような状況において宗教の専門家に解答を求めることは、形式的解決で満足することにつながり当事者が自らの世界観と向き合い、問題を引き受ける中で、自ら答えを出す機会を失うことにもなりかねないと考えるからだ。

宗教に求められているのは、「今」という時間限定し、人間社会のみを対象とした既存の支配的な価値観を自明なものとして、当事者に「いのち」についての決断を迫る状況を相対化させることではないだろうか。そして、それぞれの宗教のもつ世界観から人と人、人と自然、現在過去未来のつながりの回復を促していくことが求められているのであり、その時「いのち」とともに最適な応答をしていくことが可能になるのではないだろうか。そして、これは宗教者によってのみ担われることではなく、宗教的世界観を生きる各自の生き様によって練り上げられるものだと考える。具体的には、宗教的天才やその専門家が圧倒的なリアリティをもって新しい生き方を示してくれることを期待するのではなく、私たち自身がそのような世界観を腑に落とす形で創造する契機を育ていく必要があるということだ。では、それはどのようにして可能なのか。

持続可能なコミュニティ形成運動にその一つのヒントがあると考えられる。一九九〇年代近年報告されるようになったエコビレッジやトランジションタウンと呼ばれるこれらの実践において

は、意識的に人と人、人と自然、現在過去未来のつながりの回復が目指されている。またこれは里山の意義など伝統知や実践の再発見、再評価にもつながっている。

ローカルな、顔の見える範囲で、日々の生活の中から、「いのち」のつながりにおいてそれぞれが最適な応答が可能になるような実践例を積み上げていく中に、宗教的なものが確認されるようになるのではないだろうか。

「いのち」が語られる地平

——他なるものとのかわりをめぐって——

竹之内裕文

「いのち」が氾濫している。近年の日本社会では、「生命」、「生」、あるいは「人生」などの類義語ではなく、むしろ「いのち」という語が好んで援用される。そのような傾向は、学術領域においても顕著になりつつある。しかしなぜ「いのち」なのか、立ち止まって考えてみる必要があるだろう。

厳密な定義を与えることは困難であるにしても、「生命」、「生」、「いのち」は、それぞれに固有な意味合いを踏まえて語り出されていると考えられる。たとえば「生命」には、「生命科学」という研究分野に示されるように、「あらゆる生命に通ずる生命一般、動物とか、生物とか、あるいは有機体とつながる」意味合いが認められる(上田閑照『生きるということ 経験と自覚』人文書院、一九九一年)。また「生」には、「生活」や「人生」に通じるような人間的・文化的なニュアンスが色濃い。対して「いのち」は、より包括的な概念として、「生きる」